

2025

HARVARD-YENCHING
INSTITUTE WORKING
PAPER SERIES

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本における
アリスの冒険

**AUTOETHNOGRAPHIC FICTION: ALICE'S
ADVENTURES IN MULTILINGUAL JAPAN**

Aoyama Waka | The University of Tokyo

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険 Autoethnographic Fiction: Alice's Adventures in Multilingual Japan

Waka Aoyama (The University of Tokyo)

Abstract: These essays are the first drafts of the chapters for an autoethnographic fiction titled *Fustuno Maruchiringaru (An Ordinary Multilingual)*, scheduled for publication in 2027. From June 2024 to February 2027, approximately 20 chapters, including a prologue and an epilogue, are planned to be written in Japanese. The work is based on the author's personal experiences and follows a character named Alice, born and raised in Japan, whose first language is Japanese. The story portrays Alice's everyday use of multiple languages. While Japan is often misunderstood as a "monolingual society," the work shows that it is, in fact, a "multilingual society," and it challenges the concepts of "ordinary" and "equality" in postwar Japan from the perspective of language use. Themes such as diversity, coexistence, colonial and wartime aggression, and the power of language are explored, with a narrative of homeland loss and regeneration. The work encourages critical reflection on our unawareness of the privilege of "Japanese" and "English" and the linguistic hierarchies we live with, aiming to bring out the reader's own "language stories." Grounded in critical metalinguistic awareness, it seeks to explore the possibilities of creating a socially just world. In order to prepare for the publication of a future English edition and to explore the impossibility of translation, English translations of all chapters are included.

Keywords: Multilingual Japan, Language Use, Being Ordinary/Normal and Egalitarianism, Colonial and Wartime Aggression, Critical Metalinguistic Awareness

要約：これらのエッセイは、2027 年度に出版予定の『ふつうのマルチリンガル』という自伝的民族誌的フィクション作品の各章の初稿である。2024 年 6 月から 2027 年 2 月にかけて、プロローグ、エピローグを含む約 20 章が日本語で執筆される予定である。本作では、著者自身の経験に基づき、日本生まれ日本育ち、母語が「日本語」であるアリスという人物が、日常的に多言語を使う様子を描く。日本が「モノリンガル社会」と誤解されがちである一方、実際には「マルチリンガル社会」であることを示し、戦後日本における「ふつう」や「平等主義」を言語使用の観点から問い直す。多様性、共生、歴史的加害性、言葉の力をテーマに、故郷喪失と再生を描く。とくに「日本語」や「英語」の特権性や言語的ヒエラルキーに無自覚なわたしたちに対する批判的反省を促し、読者自身の「言語の物語」を引き出すことを目指す。批判的メタ言語意識を軸に、社会的公正な世界への可能性を探る一冊である。将来の英語版の出版に備えるために、また翻訳不可能性を探るために、全章の英訳を付す。

キーワード：マルチリンガル社会としての日本、言語使用、ふつうと平等主義、歴史的加害性、批判的メタ言語意識

自伝的民族誌的フィクション：多言語社会日本におけるアリスの冒険

東京大学東洋文化研究所
青山和佳

5 境川 Sakaigawa 川は氾濫する

教室のなかで散歩する

川辺にひとりで立ち、静かに耳を澄ますと、わたしは鳥にさらわれる。

中学校の東側には境川（さかいがわ）が静かに流れている。この川は、ほんとうは暴れ川なのに、ふだんは穏やかにしている。家から住宅街を十五分ほど歩くと、緑に囲まれた新設校が見え、オレンジがかった赤い校舎が「ニセの現実」への入口になっている。先輩がいないこの学校での生活は少しだけ気楽だったけれど、先生はあいかわらず前に立っていたし、わたしは眠り続けていた。毎朝、知らないうちに古い橋を渡り、川の言葉に耳を傾ける。風は草木を揺らし、豎琴をかなでる。白いコサギが黒い脚をまっすぐ伸ばし、首を S の形に曲げてじっと立っている。水面がきらめき、はつとする。It's the letter S (sea, sea, sea, sun, sun, sun, swing, swing, swing)……学校に行かなければ。

この公立の中学校には、ひとつのクラスに四十人以上の生徒がいるから、先生たちはいつもとてもいそがしい。わたしは机につっぷして目を瞑っているか、もちこんだ本に浸っているか、ともかくこころは授業にまったくないのに、どの先生もわたしのことを注意しない。教科書をめくっていけば、その中身が写真のように記憶されて、必要なときに自由に引き出せるから、「成績」だけはとてもよい。なんといっても、こころはともかく、からだは机と椅子に四角くおさまっており、きわめて「おとなしい」生徒なので、先生たちにとっては手のかからない「優等生」にすぎないのかもしれない。同級生たちはそこにいるけれど、わたしは透明な膜につつまれていて、みんながなんだかとても遠くに見える。

教室のなかで、じっとしたまま散歩にでかける。朝のうちに眺めて吸い込んできた川辺のすがたを、目を瞑ることでより鮮やかに生きることができる。カワセミが水面に舞い降りる。空と水とのはざまを黄金色にくちゃくちゃにする。その翼は一瞬、夢のようにとまり、静かな波紋が広がる。『やまなし』¹で青くて光る、はじが黒く尖っているそれが来るとお魚が上にのぼっていく、その眼は赤かったかい、と蟹のおとうさんが子どもたちにきくのだけれど、赤かったかどうかはわからない。わたしの眼も赤くなることもあるだろうか。カワセミは青く見えるけれど、あれもモルフォ蝶と同じ

¹ 宮沢賢治の童話。

で、羽根の色素が青いのではなく、羽毛の細かいつくりのために光のかげんで青やみどりに見えるのだった。

このごろすこしだけ影がうすくなってきたシダは、それでもあいかわらずついてきて、教室にいるわたしの足もとにしげっており、ときどきわたしを揺り動かして起こしてくれる。「アリス、目を覚まして。先生が何か言っている」。机に両手をついてからだを起こして目をあける。まぶしい。英語の先生がわたしの前に立っている。午後のおひさまがうしろから先生を照らし、先生のくるくるとした髪のかげが細かい透かし模様のように踊っている。みとれてみると、またシダに揺り動かされる。やっと先生の顔のほうに注意をむける。先生は、英語のテストで、わたしが自分の名前のつづりをまちがっているという。Like, how is that even possible?

先生は表情を変えずに首をふる。ローマ字表記になるから、Alice ではなく、Arisu が「正しい」つづりです。Hold on, my name spells ARISU??? それは、わたしにとって、プリンをシロクマと呼べといわれるくらい意味がわからなかった。

ワイオミング州からの手紙

小学校三年生のとき、ハートの女王が引越しの理由でわたしの大切な英語のレコードと絵本を捨ててから、わたしは英語の世界と引きはなされてしまった。いっぽうで、洞窟の図書館で女王に日本語の本を読まされ、作文を書かされる毎日は、苦痛で抵抗すらあきらめていたけれど、いつのまにか終わっていた。女王はわたしの「成績」に気をとられており、成績さえよければ洞窟に呼び出すことも減っていった。見張られつつも、勉強していれば気分を害さないで、わたしは日本語で書かれた英語の参考書をひとりで読むようになった。英語と日本語が同時に書かれた本なんて、小さいときには見たことがなかったから、最初はへんな感じがしたけれど、だんだん慣れていった。おとうさんに文通相手をさがしてもらおうよう頼んだ。

それなのに、ある日、アメリカからの手紙が届いたとき、わたしはこころがつんとした。黒い髪をぴたりと編み込んだ笑顔の女の子がこちらを向き、真珠のような歯と、袖なしのドレスを白く輝かせている。深い褐色の肌をもつ少女から手紙を受け取るなんて夢にも思わなかった。彼女が住む State of Wyoming (ワイオミング州) がどこかもわからないし、長い手紙は暗号の波のようにしか見えない。返事を書こうとしても、言葉たちは霧のなかで消えるように形をなさなかった。何かこわばったものがわたしの手を止めてしまう。ほんとうは、わたしのなかの「アメリカ」のイメージが揺さぶられていた。それなのに、ただ英語がむずかしいから手紙が書けないのだと思い込んでしまった。その手紙を、机の奥のほうに埋めるようにしてしまいこんだ。

だから、ブルガリアから手紙が届いたとき、わたしはとまどった。おとうさんの友人である農芸化学者の娘さんが英語で手紙を書いてくれたのだ。丸いブロック体で書かれ、眺めると心地よく、短い詩のようだった。写真も添えられていて、明るい髪色で

ラベンダー色の服を着て、ローズの花たちとほほえんでいる。わたしと同じ歳で、絵や物語が好きだという。ブルガリアと言えばヨーグルトのイメージしかなかったけれど、彼女が暮らすソフィアには色とりどりの花があふれているらしい。地球儀を引っ張りだして調べると、ブルガリアはセルビア、マケドニア²、ギリシャ、トルコ、ルーマニアと接していることがわかった。わたしは、短い返事を書くことができた。境川沿いを散歩していると出会うことのある、灰色の頭に黄色いお腹のキセキレイ(Gray Wagtail, *Motacilla cinerea*)のイラストを色鉛筆で描いて添えた。

ソフィアから返事が届いた。封を開けると、小さな水彩画がひらりと落ちてきた。それは、川辺に一羽で立つキセキレイの絵だった。黄金色とみどり色が水面に映り、落ち葉が一枚、ゆっくりと流れている。絵には「この鳥はいつも尾を上下に振っているでしょう」と書き添えられている。じっと見つめてみる。どこかなつかしい気持ちになる。手紙には続きがあった。「じつは、もうすぐ家族でアメリカに引っ越すことになりました。おとうさんとおかあさんがニューヨーク州の大学ではたらくからです。アメリカに住むのは初めてだから、どんな川があつて、どんな鳥がいるのか、いまからどきどきしています」。わたしたちはふたりともまだおさなく、冷戦時代を生きているということを知らなかった。

言葉のなかに溶けていく

ある日、わたしは地元の学習塾で模試を受けた。思いがけず成績がよくて、塾長の先生から入塾をすすめられた。背の高い英語の先生に出会う。先生が「the earth」と発音すると、先生の口のなかに風が生まれる。泣きそうになる。中学校の教室ではめったに生まれない、なつかしい、太いのになめやかな空気の流れ、贈りもののような音。ちいさいとき英語の絵本を聴いていたことや、いまは参考書を読んでいることを話すと、先生はそうか、と目をまるくし、いろいろな辞書を見せてくれた。「これはあなたにぴったりかもしれないね」と、英語だけで書かれた辞書をひらく。「Earthにはいくつかの意味があるけれど、まず、the worldで、the planet that we live on、たとえば、the earth revolves around the sun、わかる？」 わたしは、「はい」とうなずいた。

「わたしたちの住む惑星」と定義されるとき、それは「地球」という意味になる。「わたしたち(we)」とはだれなのだろう。わたしと、わたし以外のすべての人びとや生き物が含まれるのだろうか。太陽のまわりをまわるこの天体でわたしとともに生きるすべての存在が「わたしたち」なのだろうか。わたしが想像できる生き物たちだけでなく、数えきれないほどの、呼吸をしている、あるいは呼吸をしない存在たちも。わたしが見たり聞いたり触れたりできないものたちも含めて、生きている、あるいはまだ／もう生きていない存在が、わたしとともに「わたしたち」をつくっているのだろうか。まぼろしの友だちを思い浮かべる。ワイオミング州という響きは英語に聞こえない。なぜなのか聞きたい。それでも、わたしは返事を書くことができない。

² 現・北マケドニア。

塾では「勉強が得意」な子たち五人をあつめた小さなクラスに入った。わたしたちは、県内の公立高校のほかに、東京にある国立や私立の高校も受験することをすすめられて、進度がとてもはやく、でもわからない問題についてはみんなでじっくり考える授業を受けていた。わたしが目覚めてそこに居ることに、シダはすこしおどろいたのか、葉の裏の袋から黄緑の胞子を放ち、それはふわふわと広がりながら飛んでいった。

「電話帳」というやたらに分厚い入試対策問題集を「読む」ことは楽しい。たくさんの英語に触れられる。こころが躍る。電話帳を何冊かこなしきり、もっと読みたくてたまらない。そのことに気づいた背の高い英語の先生が、ペーパーバックを渡してくれた。D. J. Salinger の *A Catcher in the Rye*.

その小さな本を持ち歩いて、ノートに書き写すようになった。鉛筆ではなくて、ボールペンで。ストーリーは追えない。そこに息づく文字のならば、単語と単語のつながり、カンマのくりかえし、ピリオドがつくるリズムと色合いを、息を吸って吐くように、ノートのうえに再現していく。いつのまにか、からだの輪郭がほどけて、言葉のなかに溶けていく。語り手は「you」と語りかけてくる。それは、だれのことなのか。語り手のおとうとは、生前、野球のミットのいたるところに、みどり色のインクで詩を書きつけていた。そのフレーズ「he had poems written all over the fingers and the pocket and everywhere. In green ink」³を、何度もノートにうたいながら、不思議に思う。どうして「he wrote poems all over……」ではないのだろう。

みどりのうた (una canción verde⁴)

みどり、
いつからだろう、その川が、
山の頂から南へくだり、海の湾へと流れだしたのは。

みどり、
いつからだろう、その川が、
名前を与えられ、クニとクニとの境とされたのは。

³ D. E. Salinger, 2019 [1951], *A Catcher in the Rye*, Penguin, 39.

⁴ スペイン語。

Verde que te quiero verde⁵,
いつからだろう、その川が、
外の流れと内の流れの違いを、ゆるやかに刻んだのは。

みどり、それなのに、
いつからだろう、その川が、
あふれだし、人びとに責められるようになったのは。

みどり、
いつからだろう、その川が、
広げられ、深められ、鎮められるようになったのは。

Verde que te quiero verde⁶,
いつからだろう、その川が、
かつて龍のような大蛇を宿していたことを忘れたのは。

みどり、それでも、
いつからだろう、その川が、
まっすぐに流れていなかったことを想いだしたのは。

みどり、
いつからだろう、その川が、
灰色の固い殻に覆われてゆく土の苦しみに触れたのは。

Verde que te quiero verde⁷,
いつからだろう、その川が、
もはや水を慈しめない土の悲しみを抱きとめたのは。

川辺に、ヘビイチゴの群れ、
蔓をのばして地を這い、根を下ろし、
葉をふるわせて、そっとうたう。

川に落ちないように

⁵ Lorca, Federico García. 1928. *Romance Sonámbulo*, from *Selected Poems* (Bilingual Spanish-English edition), translated by Merryn Williams (2021), Bloodaxe Books, 109. 本書による英訳では”Green how much I want you green.”(同 113)。必要であれば、本文中に引用符をつけます。

⁶ 同前。

⁷ 同前。

Unya、もう一回、言わせてね。
オーケイ、нека го кажа отново⁸。

川辺にひとりで立ち、静かに耳を澄ますと、わたしは鳥にさらわれる。

Sa akong pagbarog nga nag-inusara sa daplin sa suba, hilom nga naminaw, gisakmit ako sa usa ka langgam.

毎週ふつか、わたしはピアノ教室に向かう。ひとりで電車を乗り継ぎ、東横線の駅でおり、なだらかな商店街の坂道をぬけ、少し急な階段をのぼると、カイヅカイブキ（*Juniperus chinensis* 'Kaizuka'）の生垣に囲まれた広い芝生のこぢんまりした平屋が見える。おかあさんの妹、あっこちゃんのドイツ留学時代のおともだちであるピアニストが、おかあさんと暮らしている。十歳からここに通っている。幼稚園で「ねこふんじゃった」を弾き続けていたことを知ったおかあさんが、わたしのためにアップライトピアノをおばあちゃんに頼んで買ってもらい、近所の教室で始めたものの、「本格的に習わせたい」と考え、いまの先生にお願いした。電車や乗り換えの駅の混雑、明るすぎる照明、たえまないアナウンスが苦手で、通うのは、ゆううつだった。

先生の家につくと、先生のおかあさんが玄関でむかえてくださる。いつも和服をお召しになっている。こんにちは、おじゃまいたします、とお辞儀をしてから、正面向きのまま靴をぬいで、たたきをあがり、横向きに姿勢をかえてしゃがみ、右うでをのばして、ぬいだ靴を揃える。すぐ右手にある応接室にとおされたら、ソファにできるだけお行儀よく座るよう努力する。このソファは、木の枠と脚がダークブラウンで、深いみどりの皮のカバーがかかっている。ふたりがけでちょっと小さめで、座ってみるとすこし固めで、からだを沈ませるよりは背筋をのばしたくなってしまう。透明なガラス越しに、柔らかな光が部屋に入ってきて、庭の樹木や芝生がきれいに映っている。お手拭きで手を清め、温かい紅茶を飲みおわると、レッスン室に向かう。

コンクールに出場できるわけでもなく、音高や音大をめざせるわけでもなく、ピアノを弾くのがなんとなく好き、なんとなく習い続けているという、気のぬけたコーラのような生徒であるわたしにとって、演奏家でもあり、大学の教師でもある先生から週ふつか、立派なグランドピアノが二台ならんだレッスン室で四十五分習うというのは、どうみても不釣り合いで、なんだか居心地がよくない。先生は、たぶん、わたしが仲のよい友人の姪だから生徒にとってくださったのだろう。先生は元気いっぱい明るいひまわりの妖精みたいで、きびしく指導しているはずなのに、太陽のうたをうたうように教えられる不思議なひとだった。息抜きは、森にピクニックに出かけることだろうかがったことがある。森なんか、近くにあったらうか。

⁸ ブルガリア語。

『インヴェンションとシンフォニア』(J. S. Bach, the Inventions and Sinfonias, BWV 772-801) の楽譜を持っていくのをよく忘れる。自分でも不思議に思う。どこかに苦手意識があるのかもしれない。それでも、楽譜を本のように眺めると、圧倒される感覚が湧いてくる。先生が教えてくださった。「対位法」は、いくつかの旋律を同時に演奏する作曲の方法なの。それぞれの旋律をもつ声部を組み合わせて楽曲を作り、その旋律同士の流れや絡みを大事にする。こういう多声音楽を「ポリフォニー」と言います。ポリフォニーは、いろんな旋律が同時に響いて、豊かな音の世界を作り出すの。この曲集では、二つ、ときに三つのべつべつ流れの川が絡み合って、広やかな世界を生み出していく。そのときに、響きをまとめているのが、調性なの。

バッハの川は氾濫しない。非常に構造的で技巧的。リズムの精密さ。数学的に精緻に組み立てられている。感情よりも理性。そういうのが定説。でも、ほんとうだろうか。*A Catcher in the Rye* の語り手を呼びだして、語りかけてみる。「なんだか、やたらきっちりしているよね。あの音の一つひとつが、まるで誰かに命令されているみたいに動いている感じがする。だけど、妙に落ち着くよね。ぜんぶちゃんとハマっているっていうか、どっかでミスっている気がしないよね」。でも、ほんとうにそうだろうか。バッハの川も、ほんとうは暴れたいのに、それをぎゅっとおさえ込んでいる感じがする。姿勢正しく静かに弾けば弾くほど、唐草のような狂気が繁っていく。胸骨のあたりが締めつけられ、指先から力が抜けない。あらがって、息を吐こうとする。

ライ麦畑のキャッチャーがこたえる。まったくクレイジーだよな、「羊は安らかに草を食み」(Sheep May Safely Graze, from Cantata BWV208)でも聴いておけばいい。たぶん、気に入るよ、なんだかわからないけどね。

You wouldn't want to call J.S. Bach up. You don't know.

きみは、バッハに電話したいかな？ いや、したくないかな。

Autoethnographic Fiction: Alice's Adventure in Multilingual Japan

Institute for Advanced Studies on Asia, the University of Tokyo

Waka Aoyama

Chapter 5: Sakaigawa — When the River Overflows

Walking Inside the Classroom

When I stand alone by the riverbank and quietly listen, I am carried away by a bird.

To the east of the middle school, the Sakaigawa River flows quietly. Though truly a wild river, it usually pretends to be calm. From our house, a fifteen-minute walk through residential streets brings me to a newly built school, nestled in greenery. Its reddish-orange walls form the gateway to a “counterfeit reality.” Life here, without older students, was slightly easier. Still, the teacher stood at the front as always, and I kept on dreaming. Each morning, without realizing it, I crossed the old bridge and listened to the river’s voice. The wind rustled the grass and trees, strumming a harp. A white egret stood still, black legs extended, neck bent into an S. The surface of the water shimmered, catching my breath—It’s the letter S. (sea, sea, sea, sun, sun, sun, swing, swing, swing...) ...I must go to school.

At this public middle school, with more than forty students in a single class, the teachers were always very busy. I usually rested my head on the desk with eyes closed or lost myself in the book I had smuggled in—my mind was never in class. Yet none of the teachers scolded me. I had excellent grades, thanks to my ability to flip through the textbooks and recall their contents like photographs, retrieving them at will. I suppose I was just another “well-behaved honor student” in their eyes: physically present, tucked neatly into desk and chair, causing no trouble.

My classmates were there, but I felt enveloped by a translucent film, watching them from afar.

Even as I sat still, I would go walking inside the classroom. With my eyes closed, the riverside scene from that morning returned with greater clarity. A kingfisher dove into the water, turning the space between sky and stream into a swirl of golden light. Its wings paused like a dream, then

vanished, leaving ripples behind. In “Yamanashi,”⁹ the father crab asks his children if the blue, glowing creature—pointed black-edged and descending from above—had red eyes. I don’t remember if they were red. I wonder if my own eyes will ever turn red. Kingfishers appear blue, but like the morpho butterfly, their feathers contain no blue pigment. Their color comes from the microscopic structure of each feather, refracting light into hues of blue and green.

The fern, now slightly faded in its shadow, still followed me. It gathered thickly at my feet beneath the desk, occasionally stirring me awake. “Alice, wake up. The teacher is saying something.” I placed my hands on the desk, straightened up, and opened my eyes. The sunlight dazzled me. The English teacher stood before me, afternoon sun lighting him from behind. The curls of his hair shimmered like a fine lacework. I stared, mesmerized—until the fern nudged me again. I finally turned my gaze to the teacher’s face. He said I had misspelled my own name on the English test. Like, how is that even possible?

Without changing her expression, he shook his head. “Since we use romanization, the correct spelling is not ‘Alice’ but ‘Arisu.’” Hold on. My name spells ARISU??? To me, it was as nonsensical as being told to call pudding a polar bear.

Letters from Wyoming

In third grade, the Queen of Hearts had thrown away my precious English records and picture books “because of the move.” That marked my separation from the English world. Meanwhile, I resigned myself to the Queen’s cave library, where I was made to read Japanese books and write compositions. It was painful, but at some point, I gave up resisting. Eventually, it ended. The Queen grew preoccupied with my grades. As long as they were good, she called me to the cave less and less. Under surveillance but unbothered, I began reading English study books written in Japanese on my own. At first, the bilingual format felt strange—I had never seen anything like that as a child—but I gradually got used to it. I asked my father to help me find a pen pal.

Then, one day, a letter arrived from America. A girl with tightly braided black hair smiled at me, her pearly teeth shining, her sleeveless dress gleaming white. I had never imagined receiving a letter from a girl with deep brown skin. I didn’t even know where the State of Wyoming was. Her long letter looked like a sea of encrypted waves. I tried to reply, but my words melted away like

⁹ A short story by the Japanese poet and author Kenji Miyazawa.

fog. Something tense inside me held back my hand. Truthfully, my image of “America” had been shaken. Still, I convinced myself I couldn’t write back simply because English was too hard. I buried her letter in the depths of my desk drawer.

So, when a letter from Bulgaria arrived, I was unsure what to do. It came from the daughter of my father’s friend, an agricultural chemist. Her round, block letters were comforting, like a short poem. A photo was enclosed—she wore lavender and smiled among blooming roses, her hair a bright golden brown. We were the same age, and she said she loved drawing and stories. All I knew about Bulgaria was yogurt, but now I imagined Sofia filled with colorful flowers. I looked it up on the globe and learned it bordered Serbia, Macedonia¹⁰, Greece, Turkey, and Romania. I managed to write a short reply. I drew a gray wagtail I sometimes saw walking by the Sakaigawa—a Gray Wagtail, *Motacilla cinerea*—with its yellow belly and gray head, using colored pencils.

Her response arrived. When I opened the envelope, a small watercolor fluttered out. It was a painting of a lone gray wagtail standing by the riverbank. Gold and green reflected in the water, a single fallen leaf drifting slowly downstream. She wrote, “This bird always wags its tail up and down, doesn’t it?” I gazed at it for a long time, overwhelmed by a strange nostalgia. The letter continued: “Actually, my family is moving to America soon. My parents will be working at a university in New York State. I’ve never lived in America before, so I’m nervous and excited to see what kind of rivers and birds are there.” We were both still so young. Neither of us yet knew what it meant to live during the Cold War.

Dissolving into Language

One day, I took a practice test at a local cram school. To my surprise, I scored well, and the head teacher encouraged me to enroll. There I met a tall English teacher. When he pronounced “the earth,” a breeze formed in his mouth. I nearly wept. It was a rich, textured airflow—a sound like a gift, something rarely born in the middle school classroom. I told him about listening to English picture books as a child and reading grammar guides now. He widened his eyes and showed me many dictionaries. “This one might suit you,” he said, opening a monolingual English dictionary. “‘Earth’ has several meanings. First, ‘the world,’ or ‘the planet that we live on.’ For example, ‘the earth revolves around the sun.’ Got it?” I nodded. “Yes.”

¹⁰ Present-day North Macedonia.

When defined as “the planet we live on,” Earth becomes “chikyuu(地球).” But who is included in “we”? Is it just me and other humans and animals I can imagine? Or all forms of life—those that breathe, and those that don’t? Those I can’t see or touch or hear? All living, formerly living, and never-alive beings might form the “we” alongside me. I think of imaginary friends. “Wyoming” doesn’t sound English to me. I want to ask why. Still, I can’t write back.

I joined a small class of five students who were “good at studying.” We were encouraged to apply not only to local public high schools but also to national and private schools in Tokyo. The pace was fast, but we took our time with difficult questions. The fern seemed startled to see me awake and fully present. It released light-green spores from the underside of its leaves, which floated gently in all directions. Reading the bulky entrance exam prep books—nicknamed “phonebooks” for their sheer size—felt joyful. These thick volumes, as heavy and densely packed as an actual telephone directory, were filled with English problems from cover to cover. So much English! My heart danced. After finishing several of these “phonebooks,” I craved more. The tall English teacher noticed and handed me a paperback: *The Catcher in the Rye* by J.D. Salinger.

I began carrying that small book with me, copying it into a notebook—not in pencil but in pen. I didn’t follow the story. Instead, I recreated the pulse of its phrases, the flow of words, the rhythm of commas, the tone of periods. Like breathing in and out. Without realizing it, my bodily boundaries dissolved, and I melted into language. The narrator addresses someone as “you.” But who is “you”? His younger brother, before passing away, had written poems in green ink all over his baseball mitt—on the fingers, the pocket, everywhere. I copied that phrase repeatedly into my notebook: “he had poems written all over the fingers and the pocket and everywhere. In green ink.”¹¹ I kept wondering—why not just say, “he wrote poems all over...”?

A Green Song (una canción verde¹²)

Green,
when did the river begin,
to descend south from mountaintops and pour into the bay?

¹¹ D. E. Salinger, 2019 [1951], *A Catcher in the Rye*, Penguin, 39.

¹² Non-English words in this poem are Spanish.

Green,
when did the river begin,
to receive a name and mark the boundary between two nations?

Verde que te quiero verde¹³,
when did the river begin,
to gently carve the difference between outer flow and inner flow?

Green, and yet,
when did the river begin,
to overflow and be blamed by the people?

Green,
when did the river begin,
to be widened, deepened, and subdued?

Verde que te quiero verde¹⁴,
when did the river forget
that it once harbored serpents like dragons?

Green, and still,
when did the river begin,
to remember it never flowed in a straight line?

Green,
when did the river begin,
to touch the pain of soil wrapped in a gray, hardened shell?

¹³ Lorca, Federico García. 1928. "Romance Sonámbulo," in *Selected Poems* (Bilingual Spanish-English edition), translated by Merryn Williams (2021), Bloodaxe Books, p. 109. In this edition, the phrase is translated as "Green how much I want you green." (p. 113).
Quotation marks can be added in the main text if needed.

¹⁴ Same as note 5.

Verde que te quiero verde¹⁵,
when did the river begin,
to hold the sorrow of soil that can no longer cherish water?

At the riverbank, a cluster of wild strawberries—
spreading vines along the ground, taking root,
trembling their leaves, and softly singing.

To Keep from Falling In

Unya, let me say it again.
Okay, нека го кажа отново¹⁶.

When I stand alone by the riverbank and quietly listen, I am carried away by a bird.

Twice a week, I went to piano lessons. I rode trains alone, transferred lines, got off at a Tōyoko Line station, passed through a gentle sloping shopping street, climbed a steep staircase, and arrived at a cozy single-story home with wide lawns and a hedge of “Kaizuka-ibuki” (*Juniperus chinensis* ‘Kaizuka’). My piano teacher, a friend of my mother’s younger sister from her time in Germany, lived there with her mother. I had started going at age ten. I’d always played “Neko Funjatta” in kindergarten. When my mother saw that, she asked my grandmother to buy me an upright piano and enrolled me in a nearby studio. But later she thought, “Let’s get serious,” and brought me to this teacher. I disliked the crowded trains, glaring lights, and endless announcements. I hated the commute.

At the teacher’s home, her mother welcomed me at the entrance, always in kimono. I’d bow and say, “Hello, thank you for having me,” remove my shoes while facing forward, step up into the entryway, turn sideways, crouch, stretch out my right arm, and align my shoes. I was led to the parlor on the right, where I sat primly on a green leather sofa with a dark wood frame. It was a bit small and firm, making me want to sit up straight. Through the glass, soft light filled the room,

¹⁵ Same as note 5.

¹⁶ This phrase is in Bulgarian.

and the garden shimmered beyond. After wiping my hands and drinking a cup of black tea, I headed to the lesson room.

I was like flat cola—someone who liked playing piano “somehow,” with no dreams of competitions or music school. Yet, I received forty-five-minute lessons twice a week in a room with two grand pianos. It felt mismatched. The teacher probably accepted me because I was the niece of her close friend. She was like a sunflower sprite—cheerful and bright, yet somehow able to teach even strict exercises like a song of sunshine. Her favorite break, she once said, was to go picnicking in the forest. Was there even a forest nearby?

I often forgot my *Inventions and Sinfonias* (J.S. Bach, BWV 772–801) score. I didn’t know why. Maybe part of me resisted it. Yet, when I stared at the music as if reading a book, it overwhelmed me. The teacher explained, “Counterpoint is a method of composition using multiple melodies at once. We call such richly layered music ‘polyphony.’ In this collection, two or sometimes three distinct streams entwine and generate a spacious world. Tonality holds everything together.”

Bach’s river doesn’t flood. It’s rigid, structural, and technical. Precise rhythms, mathematical assembly. Reason over emotion. That’s the common view. But is it true? I summoned the narrator of *The Catcher in the Rye* and asked, “It’s super tight, right? Each note moves like it’s being ordered by someone. But weirdly, it calms me. Nothing feels out of place. No mistakes.” Still, is that really so? Bach’s river feels like it’s holding back a wild urge. The more politely I play, the more arabesques of madness seem to grow. My sternum tightens, my fingers won’t relax. I resist and try to exhale.

The catcher from the rye replies: “It’s totally crazy, man. Maybe listen to “Sheep May Safely Graze” (from Cantata BWV208) or something. You might like it. Who knows.”

きみは、バッハに電話したいかな？ いや、したくないかな。

You wouldn’t want to call J.S. Bach up. You don’t know.